

ベートーヴェンへの旅 vol.3

ベートーヴェンの音楽的思考の根底にあるものとは…。

ベートーヴェンの思想と音楽を育んだ「時の霊」(時代精神)

前は個人的な「ベートーヴェンへの旅」を語りました。ひとりひとりの人生がかけがえのないものであることに、ベートーヴェンの音楽は気づかせてくれました。それだけではありません。彼の音楽には社会を変える力がある。もっと正確にいうと、よりよい世界への道筋を照らし、その道を一緒に歩んでゆく勇気を与えてくれるのです。その背景を、実体験をふまえて、もう少し詳しくお話ししたいと思います。ベートーヴェンの思想と音楽を育んだ「時の霊」(時代精神)には、現代社会にも通用する精神の力があるからです。

もし「人生は無意味だ」と感じることがあるとすれば、それは自分と社会(国家)との関係がゆがみ、ねじれているからでしょう。理不尽な政治的抑圧があるとすれば、わたしたちは、かけがえのない自分の人生を生きるに値するものとするために、力を合わせて社会や国家の不条理を変えてゆくべきです。自由と平等と連帯(人類がみなきょうだいとなること)。それはフランス革命によって闡明(せんめい)となった近代市民社会の普遍的な価値です。王侯貴族や聖職者が支配する社会のしくみを変えて、市民(民衆)が主人公となる世界のために立ち上がる共和主義の理念です。

ベートーヴェンと同じ1770年にドイツで生まれた哲学者のヘーゲルと詩人のヘルダーリン。フランス革命が勃発したとき、彼らは多感な大学生でした。フランス革命の精神がドイツの3巨星を育み鍛え、その後の世界の芸術的、哲学的な発展の礎となりました。この時代の豊穡な精神文化に圧倒され、わたしは40年以上も勉強を続けてきました。日本社会の現実絶望すると、いまでも「1770年にドイツに生まれたかった」と心底から思うのです。

もっとも、ある超大国に抑圧されて、戦後長きにわたって自主的、主体的に政治と社会を変えることが難しかった点では、ドイツと日本は共通する背景をもっています。ところが、いまだに変わらない、いや変われない日本に対して、ドイツはちょうど30年前に東西統一によって「真の」独立国となりました。しかも「ヨーロッパの中のドイツ」として。

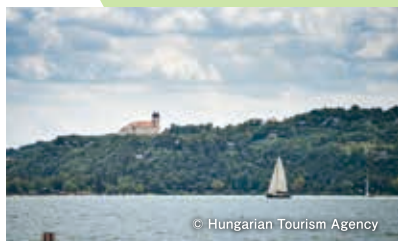
ベートーヴェンの思想と音楽を育んだ「時の霊」の強さとしなやかさが、現代のヨーロッパをも貫いているのです。自己刷新しながら新しい市民社会と、国家レベルを超える世界共和国をめざす弁証法的な運動。これこそが「レジリエンス」と呼びたい精神活動であり、ヘーゲル哲学とともに、ベートーヴェンの音楽的思考の根底にあるものです。

1989年の夏の歴史的大転換

1989年11月9日にベルリンの壁が崩壊して30年が経ちました。1989年は奇しくもフランス大革命から200年目。ヨーロッパ中で多くの記念イベントが行われるなか、わたしはその夏、滞在中のドイツから武蔵野合唱団の第3回目のハンガリー旅行に合流し、コバケン先生の指揮で「カルミナ・ブラーナ」などを陽気に歌っていました。ところがこのとき、ブダペストの西ドイツ大使館は東ドイツからの亡命申請者が押し寄せてパニック状態に。なぜ、東ドイツからブダペストに大量の「政治難民」がやってきたのでしょうか？

当時は、なにしろ「鉄のカーテンの時代」。東ドイツ市民が夏のバカンスを過ごすことの許される目的地は東欧圏に限られていました。一番人気は、ハンガリーの南西にあるバラトン湖。びわ湖ほどの広さの風光明媚な避暑地で、湖水はほのかに甘く、わたしも当地の高級ワインを満喫。もちろん、西ドイツからもバカンスに訪れます。東西に分断された親族や友人にとって、バラトン湖は「約束の地」だったのです。

さて、青空に恵まれない東ドイツの市民は、1989年の夏も紺碧のバラトン湖を「目的地」に申請して、政府からバカンスの許可を得ました。ところが、彼らはちっぽけな国民車トラバントに家財道具を積み込んで出発し、途中のブダペストで西ドイツ大使館に駆け込んだのです。歴史の大転換が、ここから始まります。1989年秋の激動は、そのちょうど200年前に起きたフランス革命と同じく、世界の歴史に銘記されることとなりました。



「約束の地」バラトン湖



国民車トラバント(一番左が筆者)

Beethoven Zyklus

神戸大学大学院教授 / 音楽評論家

藤野 一夫

2019年はハンガリーとオーストリアともに、日本との友好150年目にあたりますが、オーストリア＝ハンガリー二重帝国の時代には、もちろん両国の国境は融通無碍(ゆうずうむげ)でした。しかも1989年ごろの両国は、「鉄のカーテン」による分断にもかかわらず、共同で万博を開催する計画があり、政治的雪解けを迎えていました。さらに国境の鉄条網を非公式にこじ開ける「ヨーロッパ・ピクニック計画」を支える市民運動が起こります。東ドイツ市民がハンガリーとオーストリアの国境を経由して西ドイツに亡命できるように支援したのです。



1989年の夏から秋にかけて、東西を超えた市民たちの国際的連帯が国家の決断を促し、ブダペストの東ドイツ市民たちは西ドイツへの亡命を果たしました。わたしはドイツ人の友人たちと、このような激動を現地で舌嚥(げん)を呑んで目撃し、東西ドイツとヨーロッパの未来について熱く議論しました。しかし、その数ヶ月後にベルリンの壁が崩壊するとは誰も予想できませんでした。

ライブツィヒの月曜デモをはじめとする東ドイツ国内での市民運動の高まりが、西側への旅行制限の緩和を政府に約束させました。そして独裁政権に抗議する大きなうねりの中での一つのアクシデントが壁の崩壊につながったことは、よく知られています。一方、ハンガリーとオーストリアの連携プレーが「鉄のカーテン」に風穴を開けたエピソードは忘れられがちです。しかしそこにも、世界共和国をめざす自由な精神が発露していたのです。

「第九」はEUの公式歌となりました。ベルリンの壁の崩壊も、1990年10月1日のドイツ統一も「第九」の演奏によって寿がれました。ベートーヴェンを育んだ「時の霊」がその音楽に結晶し、ドイツ統一とヨーロッパ連合の精神的基盤になってきたのです。

「芸術の自律性」を求めて

チクルス第2回のプログラムは、1800年にブルク劇場での自主演奏会で成功を収めた交響曲1番から始まります。ピアノ協奏曲第3番は1803年にアン・デア・ウィーン劇場での自主演奏会で初演されました。交響曲第8番の初演は1814年、ウィーン大学講堂での自主演奏会です。宮廷オペラとは違い、これらの自主演奏会は国の文化政策とは無縁。「公開」演奏会ですので、身分や職業を問わず、誰でも入場料を払えば聴くことができました。

公開演奏会は近代市民社会が生み出した画期的な制度です。しかし、主催者であるベートーヴェンにはリスクがありました。「お雇い」の身分から解放されて創りたい作品を創る自由を得た反面、生活は不安定に。チケット収入や楽譜の予約販売を当てとした興行ですから、そこでは自身の音楽的能力が厳しく試されたのです。このように、創作の自由と経済的自立の両輪が一致したとき、近代市民社会における「芸術の自律性」が生まれました。

さて、戦前、戦中の演奏会で深淵な美的共同体を具現(ぐけん)した巨匠たちの解釈がステレオ初期の録音で聴けることに感謝したいと思います。骨太かつ緻密な音楽に「時の霊」が濃厚に宿っているからです。1957年に録音されたカイルベルト指揮＝バンベルク響の交響曲第1番は、決然たるリズムを刻んだ推進力に圧倒されます。腰の強い弦に支えられ、ときに金管が音を割って炸裂。積み掛けるテンポもスリリングです。

ピアノ協奏曲第3番は、アニー・フィッシャーのピアノ、フリッツ・チャイ指揮＝バイエルン国立管というハンガリー出身のコンビが傑出(1960年録音)。一音も曖昧にしないシャープなピアノリズムと明晰な指揮による透徹した掘り下げにもかかわらず、醒めた演奏ではなく、木管の重ね方が絶妙で愉悅感に満ちています。クーベリックは様々な名門オケを使い分けて全集を完成させましたが、ジョージ・セルに鍛え上げられたクリーヴランド管との第8番こそは極め付けの名演(1975年録音)。立体的造形と流動性が融合した美学に魅了されることでしょう。



藤野 一夫 プロフィール

1958年、東京生まれ。神戸大学大学院国際文化学専攻教授。ベルリン自由大学国際高等研究所フェロー、文化経済学会理事、文化政策学会副会長、(公財)びわ湖ホール理事、(公財)神戸市民文化振興財団理事、日本ワーグナー協会理事他、専門はドイツ哲学・思想史、音楽文化論、文化政策学。近著に『ワーグナー 友人たちへの伝言』(法政大学出版局)、『公共文化施設の公共性』(水曜社)、『行政改革と文化創造のイニシアティヴ』(美学出版)、『地域主権のドイツの文化政策』(美学出版)。日経新聞等の音楽批評を担当。